

真ん中に立たれる主（イースター）

丸山 勉

【聖書】 ルカによる福音書 24章 36～53節

こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。」こう言って、イエスは手と足をお見せになった。彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

【序】 イースターは、私たち自身の救いの祝い

あの十字架の上で死なれたイエス・キリストは、ご自身が予告されていたとおりに、十字架の日から数えて三日目に復活なさいました。キリストの教会は、今日、そのことによって、私たちに対する救いが全く確かなものとなったと、その主のみわざを讃えるイースター礼拝を捧げています。私たちも、ここ川越教会に集められて、今年もご一緒にイースターの礼拝を捧げることが出来ていることは、本当に感謝なことですね。

イースター。それは単にイエス様が、新しい甦りの体を持って復活されたことをお祝いする日ではないと思うのです。「イエス様、死から甦って良かったねえ。目出度いことだ」と、そのように客観的にお祝いする日ではないと思うのです。そうではなく、**イエス様の復活は、実は私たち自身の復活**ということと切り離すことは出来ません。そういう意味で、「イースター、おめでとう！」なのです。**私たち自身の**

お祝い、救いのお祝いなのです。

使徒パウロは、コリントの信徒への手紙一の 15 章で、「最も大切なこと」として、キリスト教信仰の中核を記しています（先ほど交読文として読みました）が、そこでこのように書いています。——1 節で「兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません」と言い、その内容として 3 節以下でこのように記しました。「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。」

パウロは、「最も大切なこととして私が伝えたのは、私も受けたことだ」と言い、そのことを何としてでも伝えたいのだ、それがあなた方の「生活のよりどころ」、つまり「生きることの根拠」になるのだ、と言っているわけです。そしてその中心は、主イエス・キリストの十字架の死と復活であり、文字通り、その事実によって私たち一人ひとりには生かされ、正に、今日のルカ福音書の箇所です。弟子たちが最終的に「大喜び」したように、私たちにもその喜びが与えられているのです。その喜びとは、どんな喜びなのでしょう。

[1] 「あなた方に平和があるように」

私たちは、先週、主の十字架のむごたらしい場面を聖書から読みました。よく「イエス・キリストは死んで下さった」と言いますが、それはあとから信仰者が感謝を持って言う言葉としてはそうなのですが、イエス・キリストは、当時の世の中から捨てられ、殺されたのです。そのことは見逃すことは出来ません。では、殺したのは誰か？ 当時の世の権力者たちや、宗教家として権威を持っていた人々だけではありませんよね。イエス様の弟子たちや群衆たちもやはりイエス様を殺してしまったのです。それは何を意味しているのか。—私たちも弟子たちや群衆たちと同じ人間だ、イエス様を—神の子を—十字架に追いやったのは私たち自身なのだ、ということです。

それを踏まえて今日のところを味わって見ましょう。この直前の 13 節から 35 節に記されている物語に登場している二人の弟子、この二人はエマオに向かっていたのですが、その道行きに同伴していた存在が復活のイエスだと分かると、もうすぐに、あの十字架の出来事があったエルサレムに戻っていった、そこで他の弟子たちと合流した、その場所での出来事です。ヨハネによる福音書でも弟子たちが一箇所に集まっていたと書いてありますが、そこでは、「ユダヤ人たちを恐れて部屋の戸に鍵をかけていた」とまで書いてあります。その場所に、復活の主が現われました。

36 節です。「こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あな

たがたに平和があるように』と言われた」。

皆さん、ここは凄いことが書かれているのではないのでしょうか。変なことを言うようですが、ちょっとイエス様の立場になって考えてみましょう。もし私たちがイエス様だったら、「あなたがたに平和があるように」となどと言えるのでしょうか？ イエス様は殺されたのです。そのイエス様と弟子たちは三年間共に生活をしてきた間柄です。イエス様は本当に弟子たちを愛されました。けれども**その弟子たちは皆イエス様のもとから逃げ出したり裏切ったりした訳です**。イエス様が死んでまだ三日目です。弟子たちは、いくら「イエス様が甦ったらしい」という報告を耳にしても、それを受け止められないでいるのです。心底嬉しいニュースとして聞けないのです。何故なら**自分たちの不甲斐なさ、惨めさが、それこそ心に「鍵をかけて」**いましたから。

ですから、再びイエス様が現われたとしても、それは自分たちを**裁く**ため、弟子として**失格の烙印**を押されるため以外でないと思ったかもしれません。そして、イエス様にはそのことが出来たことでしょう。「見損なったよ。選んだわたしが馬鹿だった」と言われてもおかしくないでしょう。…けれども、イエス様はそんな言葉は一言も仰いません。いえ、むしろ、そんなおののいている弟子たち（鍵をかけている弟子たち）に向かって、「**平和、汝にあれ**」と仰ったのです！

この言葉には、**イエス様の「ゆるし」**が込められています！「**裁き**」ではなく、**弟子たちへの「受容」**がここにあります。再び立ち返り、生きることが出来るように、イエス様の方が招くその「招き」です。そして仰いました。ありったけの愛とゆるしを込めて。——「**あなた方に平和があるように**」。

そして、これをイエス様は、そこにいた弟子たちの「**真ん中に立って**」言われたのです。ヨハネ福音書でも「真ん中に立って」と書かれています。今、イエス様はこの弟子たちが集まっている部屋の「真ん中」にいて下さっているのです。「真ん中」っていいですね。人間的な言い方をしますと、私たちの交わりというのは、偏りが起こりやすいものですよね。「仲良しグループ」などという言葉があるように、人間関係と言うのはどこか**いびつなもの**がいつでもあるものです。けれども、**復活の主は、弟子たちの「真ん中」**に来られました。イエス様は、弟子たちを、また、人を偏り見ないお方なのです！——この川越教会の真ん中にもイエス様は来て下さっていることを信じます。**誰もが、イエス様と近いのです！**

[2] 復活された後も、ずっと共に

それでも弟子たちは「**恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った**」とあります。声は聞こえるのですが現実のこととは思えない。「亡霊」とありますけれども、原語は単に「**霊**」という言葉です。…そこで**イエス様がなされたことは、何とへりくだられた事柄**でしょうか。イエス様は、彼らの恐れおののく心を見抜いて、ご自分の手

や足をお見せになり、「触ってみなさい」とさえ言っておられます。彼らの不信仰の心の中にどンドンご自分から入っていかれているのです。主の「手と足」、そこには、十字架の釘跡を見て取ることができた筈です。単なる「霊」でしたら、そんな傷跡はあり得ません。まさしくあの十字架の上で死に、墓に葬られたわたしなのだよ、と、彼らの不信仰を責めるどころか、彼らの中に復活の信仰が与えられるように働きかけておられるのです。私たちが今主を信じる信仰が与えられているとすれば、それはイエス様ご自身が、私たちの心にその「信仰を与えて下さって」いるからなのです。

さらに、弟子たちは、喜びながらも、まだ信じられず、不思議がっていたとあります。今度イエス様がなさったことはと言えば、「何か食べ物があるか」と尋ねられ、弟子の誰かが焼いた魚を差し出すとイエス様はそれを彼らの目の前にばくばくと食べ始めたと言うのです。ユーモラスさえありますね。「え？ 復活したお体なのに、食べるなんてどういうこと？」と置いてしまいますが、これは、これまで弟子たちと共に生きてきた三年間をイエス様はちゃんと知っているということ、そこで生まれた絆を決して切ることはないのだということ、そして、これからもあなた方の「生活」のただ中にわたしはいるのだよ、ということを示されたのではないのでしょうか。ひとたび「人」となって来て下さったイエス様は、復活された後も、私たちの地上の営みの真っ只中にいて下さるお方なのです！ 主を死に追いやった「罪人」の私たちを見捨てず、共に生きて下さるのです。ここにも主の「愛」があります。「ゆるし」があります。

[3] 信仰とは、聖書に聴くこと

イエス様は、復活されて、弟子たちに一番伝えたかったことは何なのでしょう。それが、44 節以下にあることだと思うのです。「信仰」とは、「今こそ聖書に聴く」ということだ、ということです。わたしイエスのことは、実は全部、旧約の時代から、聖書の中に書いてあることなのだよ、と。わたしはこれから天に昇って姿が見えなくなるが、み言葉に聴くことさえすれば、あなたがたは大丈夫、み言葉を通してわたしと出会うことができる、と仰っているのです。

ただ、聖書が本当に分かるためには、自分の頭の力ではなく、神様の力、聖霊のお働きがどうしても必要です。

甦られたイエス様はそのために、45 節で「聖書を悟らせるために彼らの心の目を開」かれました。そうです、イエス様ご自身が、私たちの曇った霊の眼を開いて下さいます。「主よ、どうぞ憐れみ、私にあなたの真理を悟らせて下さい」と祈りたいと思います。イエス様は生きておられますから、必ずそのことをして下さいます。

霊の眼が開かれると、何よりもイエス様のことが分かります。「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する」のだと。これは実は何度もイエス様は、弟子たちにお語りになっていたことです。ルカ福音書 18 章 31 節以下には、イエス様が、もう三度目ですが、弟子たち皆に、わたしはエルサレムで殺されるが三日目に復活す

ると予告をしていますが、面白いことに 18 章 34 節にこんな言葉が書いてあるのです。「十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。」

つまり、このメシア＝救い主の秘儀というべきものは、復活の主との出会いが起こるまでは「信じがたいこと」で終わってしまうのです。復活の主が目を開いて下さって、初めて、私たちの心に「主、生き給う」という信仰が生まれるのです。ですから、この 18:34 の言葉の後には、盲人の目を開いて下さる、というイエス様の奇跡の物語が書かれていますけれども、それは私たちの目の開眼を暗示していると言えます。

[4] あなたがたが必要なのだ！

私は最初に、「イエス様の復活は、実は私たち自身の復活」だということを申しました。その意味は、この 47 節以下でハッキリ致します。私たちの心の目が開かれて何が起こるのか。イエス様のことが分かると言いました。そのように変えられた私たちは、この主の証し人とされるのです。47 節に「罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」とあります。

「罪の赦しを得させる悔い改め」とありました。「罪の赦し」。本来なら、裁かれて滅ぼされても仕方がない私たちなのです。けれども、神様はイエス・キリストの十字架の愛ゆえに、もうその罪責を人間に問うことは終わってしまいました。

それどころか、罪が赦されるということは、その罪の結果である「死」も無力化されたということなのです。イエス様の復活によって「死」が「死んだ」のです。先ほども賛美しました。「主の死によりて ハレルヤ 救いはなりぬ ハレルヤ」と。

私たちは途方もない神様の憐れみと赦し、愛を受けています。その私たちに求められていることは方向転換＝悔い改めです。それだけです。そのことを、あなたがたは救いの証人、主の証し人として伝えて行きなさいということが、この 47 節以下で言われているのです。一私は、これは、ものすごい慰めだと思いました。イエス様は、弟子たちを捨てないどころか、ゆるし、「あなたが必要なのだ」と、ここで弟子たちを造り変え、イエス様が昇天後、みわざに用いようとしておられるのです。言ってみれば、もう動かなくなったポンコツ自動車を、廃棄場に処分するのではなく、イエス様がお乗りになる自動車として再生して下さるのです。そしてもう、イエス様の復活によって、新しい命の注ぎが始まっているのです！

[結] 神様の祝福の器として

私は思うのですが、私たちの「幸い」「喜び」というのは、この私という存在、私の命が喜ばれている、祝福されている、ということではないでしょうか。私たちの社会

は、その意味でとても息苦しくなってしまうのではないでしょうか。業績、実績、偏差値、データ。人間は、そういう「数字」なのでしょうか？ 誰もがロボットに替わってしまえるような存在なのでしょうか？ そしていつしか私たちも自分に愛想を尽かしてしまうことはないでしょうか？ けれども、私たちの命は、そんな周りが決めるものでも、社会が決めるものでもありません。**「私たちの命は神のもの」**。そのことを、神様はイエス様の復活によって決定付けて下さったのです！ 私たちの命には、**神の独り子の復活の命**が注がれているのです。

今日、復活のイエス様は私たちの「真ん中」に来て下さいました。私たちの命の真ん中に来て下さいました。そして、私たちの命を祝福して下さいました。50節を見ますと、イエス様は、面白いことに、祝福しながら天に上げられているのです！ 今も私たちの存在は、神様の祝福の中にあって生かされているということではないでしょうか！

さあ、キリストの愛と赦しの中、永遠の生命を与えられている者として、それぞれに与えられた環境の中で、主を讃えながら生きて参りましょう。主は今日も言われています。——「あなたがたに平和があるように」。

お祈りをお捧げ致します。